

アテネ・オリンピック大会における陸上競技日本代表選手・団の記録「達成率」ならびに実力発揮度について

岡野 進¹⁾ 佐々木秀幸²⁾
1) 明海大学 2) 早稲田大学

Achievement and Performance Rates for Japanese Athletes in Track and Field Events at the Athens Olympics

Susumu OKANO¹⁾ Hideyuki SASAKI²⁾
1) Meikai University
2) Waseda University

Abstract

This paper analyzes the achievement and performance rates for the thirty-seven Japanese representatives in the track and field events at the Athens Olympics.

- 1) The average achievement rate for both male and female Japanese athletes was low, at $96.5 \pm 3.4\%$ for 24 men and $93.7 \pm 4.7\%$ for 13 women. The women's rate was especially low. The average rate for gold medalists of all nationalities was $99.7 \pm 1.4\%$ for men and $99.5 \pm 1.9\%$ for women, while the rate for Japanese athletes was significantly lower, at the 1% and 0.1% significant level respectively.
- 2) Athletes with achievement rates of 98% or above were considered to have performed up to their abilities. A mere 27.0% of Japanese athletes, 8 men and 2 women, did so. Only one Japanese athlete, a man, was able to improve on his previous best. Of gold medalists for the total of 23 events in which Japanese men and women participated, 18 athletes, 78.3%, had a performance rate of 98% or over, and 13 athletes, 56.5%, beat their previous bests.
- 3) After taking into account the parching heat and the undulation of the course in the marathon event, it can be said that approximately 40% of Japanese male participants and 30% of Japanese female participants were able to perform up to their abilities, while approximately 90% of gold medalists in the 23 events did so.

The above analysis shows that Japanese athletes were able to perform up to their abilities much less frequently than gold medalists. 60 or 70% of them were not satisfied with their results. Possible causes include insufficient conditioning, injuries, other physical problems, mental attitude (setting low goals and having low motivation), and mental problems (nervousness and lack of mental toughness). Japanese athletes have long suffered from not being able to perform up to their abilities in the Olympics and other world competitions. The real causes need to be identified as quickly as possible so that countermeasures

I. 緒言

第28回オリンピック大会は、2004年8月、ギリシャのアテネにおいて開催された。日本の陸上競技は、男子26名・女子13名の代表選手を送った。その結果、前回のシドニー・オリンピック大会(2000

年)の金メダル1個、入賞3個を上回る「金メダル2個、入賞6個」という成績を収めた。確かに、このことは日本選手団として評価されることである。

さて、岡野(1995、1996、1999、2001)は、これまで、国際大会やオリンピックにおける陸上競技日本代表選手(以下、「日本選手」とする)・団の国

際大会における実力発揮度に関する報告等をしてきた。つまり、日本選手・団が、オリンピックをはじめとする国際大会において、自己記録に対して何パーセントの記録を出したかという「達成率 (%)」を求めることから、選手・団の実力発揮度を検証したものであるが、これも、日本選手・団を評価する一方法となろう。

岡野 (1995、1996、1999、2001) のこれまでの報告や 1999 年セビア世界陸上競技選手権大会の資料からは、達成率 (平均値±標準偏差値) 98.3 ± 1.2%を示したシドニー・オリンピックにおける日本女子選手群を例外として、他の全ての大会における日本選手団の達成率はかなり低く、各大会優勝者群の達成率と比較すると有意 (明らか) に低い値であった。もちろん、個人的にも、達成率の低い選手が多く見られた。この原因として、岡野 (2001) は、選手選考会の日程やあり方、選手の大会への臨み方や調整 (コンディショニング)、さらには大会におけるメンタル・タフネスなどの精神的なことに問題があることを指摘した。

上述したこれまでの報告を踏まえ、先に終了したアテネ・オリンピック大会における日本選手・団の達成率ならびの実力発揮度は、いかなるものであったであろうか。また、前回のシドニー・オリンピックまでの国際大会では、芳しくなかった日本選手・団の達成率や実力発揮度は、果たして今回は改善されたのであろうかといったことについて、大変興味

を抱いたので、ここに、それらを検証してみることにした。

II. 研究方法

各選手のアテネ・オリンピック大会における達成率は、大会時の記録が、自己記録の何パーセントに当たるかを、計算して求めた。各選手の諸データ (年齢・体格・記録等) については、『陸上競技マガジン』2004 年 10 月号 (別冊：アテネ・オリンピック陸上競技完全ガイド) と『陸上競技マガジン・記録集計号 (2003 年度)』ならびに『OLYMPIAN (AUTUMN)』(JOC、2004) によった。なお、自己記録については、オリンピック大会前の 2004 年 7 月 31 日現在のものとした。また、大会時記録は、各ラウンドで最も良い記録とした。さらには、日本選手・団の達成率ならびに実力発揮度と比較するための対照群として、日本選手が出場した種目の優勝者の達成率を求めた。優勝者の諸データ (年齢・体格・記録等) は、『陸上競技マガジン』(2004 年 10 月号) によった。

III. 結果と考察

1. 日本選手・団の達成率

①男子：表 1-1 は、男子選手の年齢・体格・記録ならびに達成率等を示したものである。年齢・体格 (BMI) については選手の特徴として参考ま

表 1-1 アテネ・オリンピック日本代表選手の年齢・体格・記録ならびに「達成率」(男子)

男子	氏名	所属	年齢・才	身長・cm	体重・kg	BMI	種目	自己記録	大会時記録	達成率・%	更新率・%	順位
短距離	末續慎吾	ミズノ	24	178	64	20.2	100m	10.03	10.19	98.4	-1.6	17位
	朝原宣治	大阪ガス	32	179	73	22.8	100m	10.02	10.24	97.8	-2.2	21位
	土江寛裕	富士通	30	171	65	22.2	100m	10.21	10.37	98.4	-1.6	39位
	高平慎士	順天堂大	20	179	62	19.4	200m	20.59	21.05	97.8	-2.2	40位
	松田 亮	広島経済大	24	177	70	22.3	200m	20.59	24.59	83.7	-16.3	52位
	佐藤光浩	富士通	24	175	62	20.4	400m	45.50	46.70	97.4	-2.6	32位
	山口有希	東海大	20	174	63	20.8	400m	45.18	46.16	97.8	-2.2	40位
	小坂田淳	大阪ガス	30	176	67	21.6	400m	45.05	46.39	97.1	-2.9	45位
	向井裕紀弘	西濃運輸	24	174	60	19.8	4x400mR	45.82				
	伊藤友弘	法政大	22	174	65	21.5	4x400mR	45.63				
ハードル	谷川 聡	ミズノ	32	185	80	23.4	110mH	13.53	13.39	101.0	1.0	20位
	内藤真人	ミズノ	24	185	75	21.9	110mH	13.47	13.54	99.4	-0.6	26位
長距離	為末 大	A. P. F	26	170	64	22.2	400mH	47.89	48.46	98.8	-1.2	10位
	吉沢 賢	デサント	26	180	71	21.9	400mH	48.85	50.95	95.8	-4.2	29位
	大野龍二	旭化成	19	159	47	18.6	10000m	27.59.32	29.06.50	96.1	-3.9	19位
マラソン	岩水嘉孝	トヨタ自動車	25	174	53	17.5	3000mSC	8.18.93	8.29.07	98.0	-2.0	23位
	国近友昭	エスピー食品	31	179	60	18.7	マラソン	2. 07.52	2. 21.13	90.5	-9.5	42位
	油谷 繁	中国電力	27	163	51	19.2	マラソン	2. 07.52	2. 13.11	96.0	-4.0	5位
競歩	諏訪利成	日清食品	27	178	58	18.3	マラソン	2. 07.55	2. 13.24	95.8	-4.2	6位
	谷井孝行	日大	21	166	57	20.7	20kmW	1. 20.39	1. 23.38	96.4	-3.6	15位
跳躍	山崎勇喜	順天堂大	20	177	65	20.8	50kmW	3. 55.20	3. 57.00	99.2	-0.8	16位
	寺野伸一	サンクラブ	25	176	70	22.6	LJ	8.20	7.70	93.9	-6.1	29位
投擲	杉林孝法	ミキハウス	28	185	66	19.3	TJ	17.02	16.00	94.0	-6.0	38位
	澤野大地	ニシスポーツ	23	182	68	20.5	PV	5.80	5.70	98.2	-1.8	13位
	室伏広治	ミズノ	29	187	96	27.5	HT	84.86	82.91	97.7	-2.3	金メダル
	村上幸史	スズキ	24	185	92	26.9	JT	81.71	78.59	96.1	-3.9	18位
	N=26	平均値	25.3	176.5	66.3	21.2		N=24	平均値	96.5	-3.5	24.5
		標準偏差値	3.73	6.69	10.7	2.3			標準偏差値	3.39		13.5

(注)リレー2種目、競歩2名の途中棄権は除外した。

*参考	バルディニ	イタリア	33					2. 07.29	2. 10.55	97.4	-2.6	金メダル
-----	-------	------	----	--	--	--	--	----------	----------	------	------	------

でに記載した。そこで、男子選手（24名）の達成率について見てみると、岡野（1995、1996、1999、2001）のこれまでの研究からは、達成率98.0%以上であれば、実力をほぼ発揮できたと解釈しているが、男子群の達成率（平均値±標準偏差値）は、 $96.5 \pm 3.4\%$ であった。この値は、前回のシドニー・オリンピックの $96.5 \pm 2.6\%$ とほぼ同値であり、99年セビア世界選手権の $96.0 \pm 3.0\%$ よりはやや良かったものの、広島アジア大会の $97.2 \pm 2.7\%$ や福岡ユニバーシアード大会の $96.8 \pm 3.4\%$ よりはやや低い値であった。このことは、「はじめに」においても触れたが、今回のアテネ・オリンピックの男子群の達成率は低く、実力を発揮できたとはいえないものであったと言える。同時に、今回も、男子群の達成率は、これまでと同様、改善は全く見られていなかったと言える。

個人別では、110 mHの谷川の達成率101.0%（自己記録更新の日本新記録）が最高値であり、足を傷めていた200 mの松田の83.7%が最低値であった。また、実力をほぼ発揮できたと考えられる達成率（98.0%以上）を示した選手は、8名（33.3%）であり、この中で、自己記録を達成した選手は僅か1名（4.2%）しかいなかった。

ところで、日本待望の金メダルを獲得したハンマー投の室伏の達成率は97.7%であり、実力をほぼ発揮できたとする98.0%より、0.3%足りない値であった。室伏は、オリンピック終了直後の9月23日のスーパー陸上で、83 m 15（達成率98.0%）を投げたが、このことからすると、オリンピックでは十分に実力を発揮できていなかったものと推察される。また、マラソンで5・6位に入賞した油谷と諏訪の達成率は、それぞれ96.0%と95.8%と数値的に低いものとなったのは、炎暑と起伏といった外的条件の厳しさが大きく影響したものと考えられ

る。この点、マラソン優勝者のイタリアのバルディニの達成率は、97.4%であった（後掲の表2-1参照）ことを参考にすると、油谷と諏訪は、自己の実力をほぼ発揮できたものと考えて良からう。

ところで、表1-1には記載しなかった4位入賞の4×100 mリレーの達成率は99.5%、同じく4×400 mリレーの達成率は99.8%と、ほとんど日本記録に迫っており、リレーでの実力発揮はできていたが、なぜ、個人種目ではリレーよりも低い達成率となったのか、レースへの臨み方や意気込みに違いがでたのか、いずれにせよ疑問が残るところである。また、特に期待された100 mの末續の達成率は98.4%であり、実力をほぼ発揮できていたと言える。しかしながら、準決勝にも進出できなかったことを考えると、100分の1秒を争う100 mという種目では、自己記録に近い99.5%以上の達成率（100.1%以上の自己記録が望ましい）で走らなければ、日本選手は通用しないということであろう。

②女子：表1-2は、女子選手の年齢・体格・記録ならびに達成率等について示したものである。男子同様、年齢・体格（BMI）については、参考までに記載した。女子群（13名）の達成率（平均値±標準偏差値）は、 $93.7 \pm 4.7\%$ と最悪と言える値であった。岡野（1995、1996、1999、2001）によるこれまでの値は、シドニー・オリンピックが $98.3 \pm 1.2\%$ で最も高く、セビア世界選手権が $97.8 \pm 1.8\%$ 、広島アジア大会が $97.1 \pm 4.2\%$ 、福岡ユニバーシアードが $96.8 \pm 3.4\%$ であった。女子群の場合、前回のシドニー・オリンピックでは、（実力がほぼ発揮できたと考えられる）98.0%以上の達成率を示したにも拘らず、今回のアテネ・オリンピックでは達成率95%（更新率-5%）にも満たないという最悪の結果であった。また、達成率98.0%以上を示した女子選手も、2名（15.4%）しかいなかった。

表1-2 アテネ・オリンピック日本代表選手の年齢・体格・記録ならびに「達成率」（女子）

	氏名	所属	年齢・才	身長・cm	体重・kg	BMI	種目	自己記録	大会時記録	達成率・%	更新率・%	順位
中距離	杉森美保	京セラ	26	156	49	20.3	800m	2.00.46	2.02.82	98.0	-2.0	21位
長距離	富士加代子	ワコール	22	161	45	17.4	10000m	30.51.81	33.48.66	91.2	-8.8	26位
	田中めぐみ	しまむら	28	160	43	16.8	10000m	31.34.01	31.42.18	99.5	-0.5	13位
	弘山晴美	資生堂	35	160	47	18.4	10000m	31.22.72	32.15.12	97.2	-2.8	16位
マラソン	野口みずき	グローバリー	26	150	40	17.8	マラソン	2。21.18	2。26.20	96.5	-3.5	金メダル
	土佐礼子	三井住友海上	28	167	45	16.1	マラソン	2。22.46	2。28.44	96.0	-4.0	5位
	坂本直子	天満屋	23	160	43	16.8	マラソン	2。21.51	2。31.43	93.5	-6.5	7位
競歩	川崎真裕美	海老澤製作所	24	167	52	18.7	20kmW	1。31.19	1。37.56	93.8	-6.2	40位
跳躍	近藤高代	長谷川体育	28	160	56	21.9	PV	4.35	4.15	95.4	-4.6	32位
	花岡麻帆	オフィス24	28	171	56	19.2	LJ	6.82	6.31	92.5	-7.5	34位
投擲	森 千夏	スズキ	24	169	88	30.8	SP	18.22	15.86	87.0	-13.0	36位
	室伏由佳	ミズノ	27	170	64	22.2	HT	67.77	65.33	96.4	-3.6	27位
混成競技	中田友紀	さかえクリニック	27	167	53	19.0	七種競技	5962	4871	81.7	-18.3	28位
	N=13	平均値	26.6	162.9	52.4	19.6		N=13	平均値	93.7	-6.25	22.0
		標準偏差値	3.12	5.92	12.1	3.69			標準偏差値	4.67		12.1

*参考 スデレバ ケニヤ 32 2。18.47 2。26.32 94.7 -5.3 銀メダル

た。

個人別では、10000 mの田中の達成率99.5%が最高値であり、混成競技の中田の81.7%が最低値であった。中田の達成率が極端に低かったのは、走幅跳で3回ファール(0点)したためであった。また、マラソン金メダルの野口の達成率は97.2%、5位の土佐は96.5%、7位の坂本は93.5%であった。参考までに、2位のヌデレバは94.7%であった。このようにマラソンの達成率の低さは、外的コンディション(スタート時の気温35度という炎暑と起伏コース)の影響が大きかったものと考えられる。この点、野口、土佐はヌデレバの達成率をかなり上回っていることや、入賞者の達成率の平均値が95.50%であったことからしても、二人は実力を十分に発揮したものと考えられる。事実、野口はJOC(2004)のアンケートに「積んできたことを試合でも出し切れた」ことと、「いつになく試合中、冷静に走れた」と回答している。

ところで、10000 mの福士の達成率は91.2%、砲丸投の森は87.0%と極端に悪く、体調不良や怪我等、非常に大きなトラブルがあったものと推察される。

2. 日本選手の達成率の分布

図1は、日本選手の達成率の分布を示したものである。ここでは、達成率を4段階に分けて、その分布を男女別(棒グラフ)と男女合計(折れ線グラフ)で示したものであるが、達成率100.0%以上は、自己タイ記録か自己記録を出したということになり、実力を十分に発揮できたことを意味する。また、達成率99.9~98.0%は、実力をほぼ発揮できたと考えられる値であると言えるが、達成率97.9~96.0%は、何らかの原因で実力が発揮できなかったと言える。さらに、達成率95.9%以下、達成率が低くなればなるほど、調整の失敗や精神的な問題

がいつそう大きかったことや、マラソンでは過酷な外的条件などが推察される。

さて、今回のアテネ・オリンピック(図1)においては、自己記録更新者は全体で僅か1名(2.7%)しかいなかった。また、達成率98.0%を超えた選手は、先の自己記録更新者1名と合わせて、男子8名(33.3%)、女子2名(15.4%)の計10名(27.0%)に過ぎなかった。すなわち、残りの男子16名(69.6%) + 女子11名(85.0%)の計27名(73.0%)という多くの選手が、(外的条件を全く考慮しないで達成率のみで判断すると)実力が発揮できなかったか、さらには全く実力が発揮できなかったということになる。先の1)でも述べたが、特に女子の7名(53.8%)が、達成率95.9%以下であったことは、日本選手団(チーム)として、非常に大きな問題である。

ところで、図2は、今回のアテネと前回のシドニーにおける日本選手の達成率の分布を比較したものである。これによると、両オリンピックとも、達成率の分布状況は同じ傾向であり、実力を出せなかった選手が圧倒的に多い。しかも、シドニーよりも今回のアテネの方が、自己記録更新者や達成率98.0%を超えた人数(割合)も少なかった(シドニーが14名=34.1%、アテネが10名=27.0%)。この点、これまでの岡野(1995、1996、2001)の報告や資料(1999)からも、日本選手が、オリンピックや世界選手権をはじめとする国際大会において、自己の実力を発揮できない場合が多いことが指摘されている。

大試合における選手の課題(目標)は、自己記録更新に置かれるのが通常である。この点、1991年東京世界選手権のドイツの例の場合について、Schurbert, Bernard(1992)は「世界選手権に出場したドイツ選手団の21名(23.3%)は目に見える記録の向上を示し、また36名(40%)が自己ベス

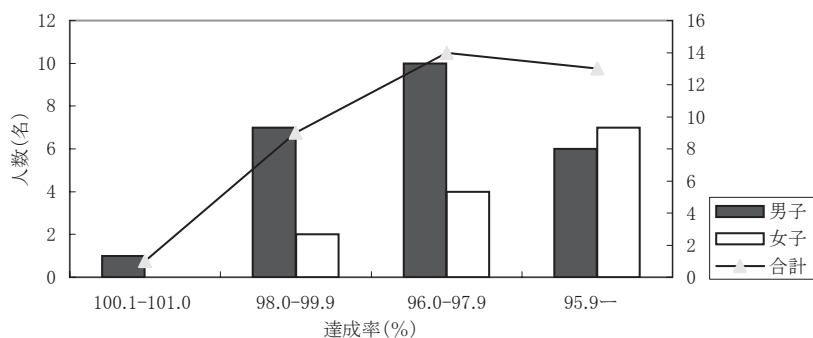


図1 アテネ・オリンピックにおける日本選手の達成率の分布(男子24名・女子13名・合計37名)

<注>棒グラフは図左側の数値、折れ線グラフは図右側の数値

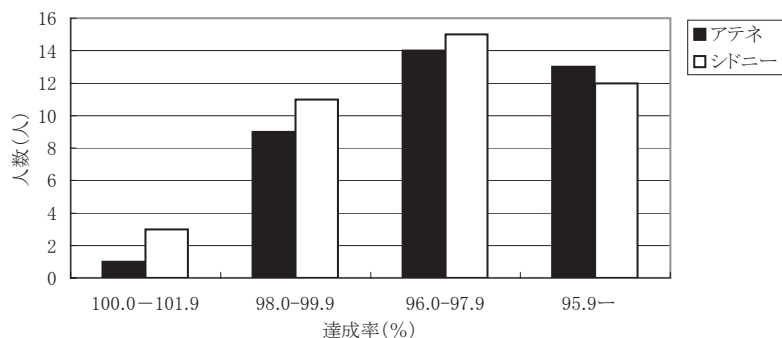


図2 アテネとシドニー・オリンピックにおける日本選手の達成率人数分布の比較—
アテネ37名、シドニー41名

トに近い記録をマークしたが、22名(24.4%)に記録の低下が見られた」と述べている。なお、22名については、「パフォーマンスの調整に問題があった」としている。この様に、ドイツ選手団は世界選手権で、実力を発揮したと考えられる選手が43名(63.3%)もいたということから比較すると、今回のアテネ・オリンピックにおける日本選手・団の実力発揮度が、いかに低いものであるかが分かるであ

ろう。

3. 優勝者・群の達成率と日本選手・団との比較

表2-1は、アテネ・オリンピック優勝者(男子)の年齢・体格・記録ならびに達成率等を示したものである。ここに掲げた男子優勝者は、日本選手が出場した15種目の優勝者である。また、表2-2は、同様に、女子の優勝者(8名)について示したもの

表2-1 アテネ・オリンピック優勝者の年齢・体格・記録ならびに「達成率」(男子)

*自己記録は2004年7月末現在

種目	選手名	国名	年齢・才	身長・cm	体重・kg	BMI	自己記録	大会時記録	達成率・%	更新率・%
100m	ガトリン	アメリカ	22	185	79	23.1	9.92	9.85	100.7	0.7
200m	クロフォード	アメリカ	26	181	75	22.9	19.85	19.79	100.3	0.3
400m	ワリナー	アメリカ	20	188	70	19.8	44.37	44.00	100.8	0.8
110mH	劉翔	中国	21	189	82	23.0	13.06	12.91	101.1	1.1
400mH	サンチェス	ドミニカ共	27	178	73	23.0	47.25	47.63	99.2	-0.8
3000mSC	ケンボイ	ケニア	22	175	62	20.2	8.02.49	8.05.81	99.3	-0.7
10000m	ベケレ	エチオピア	22	160	54	21.1	26.20.31	27.05.10	97.2	-2.8
20km競歩	ブルニエッティ	イタリア	28	175	62	20.2	1.19.43	1.19.40	100.1	0.1
50km競歩	コジェニョフスキ	ポーランド	36	178	73	21.1	3.36.03	3.38.46	98.7	-1.3
マラソン	バルディニ	イタリア	33	176	60	20.2	2.07.29	2.10.55	97.4	-2.6
走幅跳	フィリップス	アメリカ	26	181	82	25.0	8.44	8.59	101.8	1.8
三段跳	オルソン	スウェーデン	24	192	74	20.1	17.80	17.79	99.9	-0.1
棒高跳	マック	アメリカ	31	188	78	22.1	5.90	5.95	100.8	0.8
ハンマー投	室伏広治	日本	29	187	96	27.5	84.86	82.91	97.7	-2.3
槍投げ	トルキルドセン	ノルウェー	22	186	90	26.0	85.72	86.50	100.9	0.9
	平均値	N=15	25.9	181.3	74.0	22.4		平均値	99.7	-0.3
	標準偏差値		4.7	7.8	11.0	2.4		標準偏差値	1.38	

(注)種目は、日本選手の出場種目を対象とした。

ハンマー投	*アヌシュ	ハンガリー	31				84.19	83.16	98.7	-1.3
	*ドーピング失格									

表2-2 アテネ・オリンピック優勝者の年齢・体格・記録ならびに「達成率」(女子)

*自己記録は2004年7月末現在

種目	選手名	国名	年齢・才	身長・cm	体重・kg	BMI	自己記録	大会時記録	達成率・%	更新率・%
10000m		中国	20	166	50	18.1	30.31.55	30.24.36	100.4	0.4
20km競歩	ツメレカ	ギリシャ	22	157	49	19.9	1.29.34	1.29.12	100.4	0.4
マラソン	野口みずき	日本	26	150	41	18.2	2.21.18	2.26.20	96.5	-3.5
走幅跳	レバデワ	ロシア	28	171	60	20.5	7.33	7.07	96.4	-3.5
棒高跳	イシンバエワ	ロシア	22	174	66	21.8	5.90	5.91	100.1	0.1
砲丸投	クンバ	キューバ	29	183	100	29.9	19.31	19.59	101.4	1.4
ハンマー投	クゼンコワ	ロシア	33	176	76	24.5	75.68	75.02	99.1	-0.9
七種競技	クリュフト	スウェーデン	21	178	65	20.5	6820	6952	101.9	1.9
	平均値	N=8	25.1	169.4	63.4	21.7		平均値	99.5	-0.5
	標準偏差値		4.3	10.4	17.3	3.65		標準偏差値	1.94	

(注)種目は、日本選手の出場種目を対象とした。

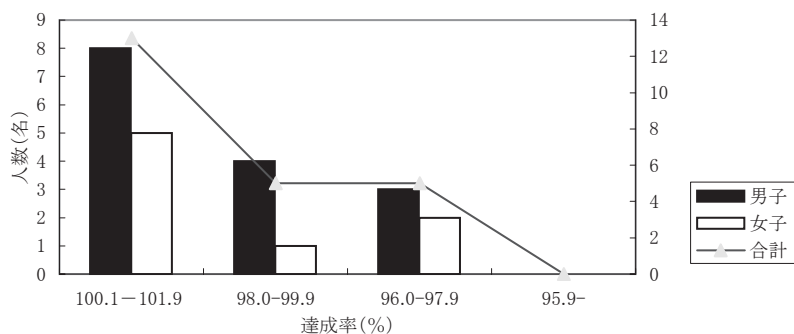


図3 アテネ・オリンピック優勝者群の達成率の分布
(注) 棒グラフは図左側の数値、折れ線グラフは図右側の数値

である。

先の1)で述べた日本選手団の場合と同様に、まず優勝者群の達成率をみると、男子群は99.7 ± 1.4%、女子群は99.5 ± 1.9%であり、共に100.0%に近い高い値であった。ここで、日本選手団の達成率と比較すると、男子優勝者群の達成率は、日本男子群よりも3.2%高く、1%レベルでの有意差が認められた。また、女子優勝者群の達成率は、日本女子群よりも5.8%高く、0.1%レベルでの有意差が認められた。

図3は、優勝者の達成率の分布を示したものであるが、達成率の高い値のところに、多くの優勝者がいる。実際の人数を追ってみると、100.1-101.9%の自己記録更新者は男子8名(53.3%)・女子5名(62.5%)の計13名(56.5%)であり、また達成率98.0-99.9%での優勝者は、男子4名(26.7%)・女子1名(12.5%)の計5名(21.7%)であった。

結局、十分に実力を発揮したり、また実力をほぼ発揮して優勝した選手は、男子が12名(80.0%)・女子が6名(75.0%)の計18名(78.3%)というものであった。

以上から、日本選手団の達成率は、優勝者群と比較すると、男女共有意(明らか)に低く、調整の失敗や大会における精神的な問題(あがり、低い緊張感やメンタル・タフネス)、さらには試合の臨み方(意気込みなどの低さ)などが推察されるのである。

ところで、図4は、今回のアテネ・オリンピックと前回のシドニー・オリンピック、さらには1999年のセビリア世界選手権における優勝者(男・女群)と日本選手(男・女群)の達成率(平均値)を比較したものである。オリンピック優勝者群は、男女共98.2-100.3%という高い達成率を示しているのに比較し、日本男子群とシドニーを除いた日本女子群の達成率の低さが目立つ。もちろん、この点につ

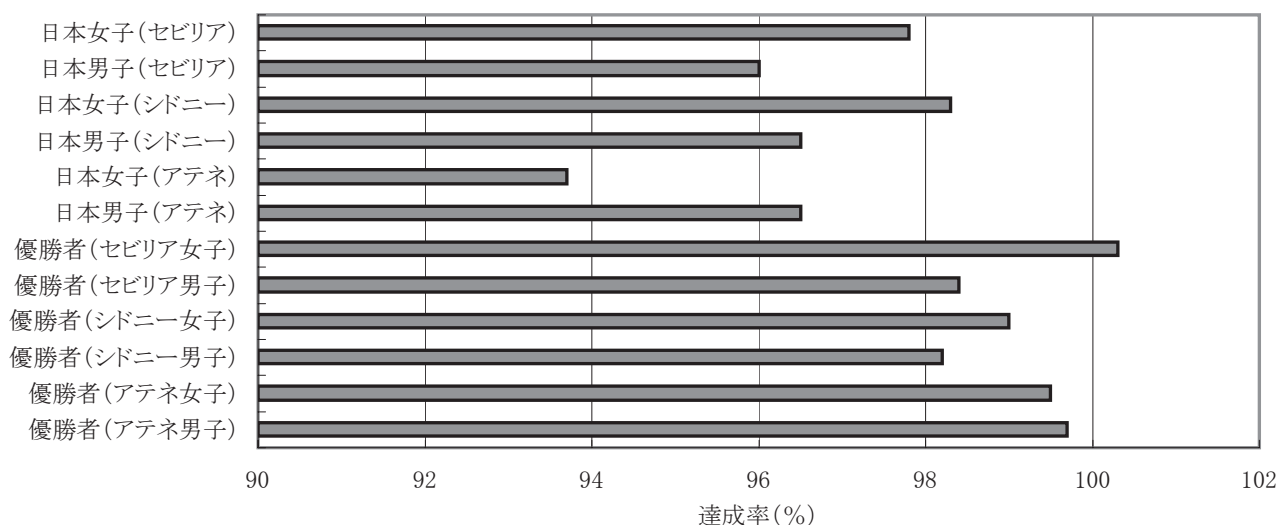


図4 アテネ・シドニー・オリンピック、99セビリア世界陸上の日本選手(男・女群)と優勝者(男・女群)の達成率(平均値)の比較

(注) シドニーの日本男子3名の記録なしは集計から除外してある。

いては、すでに指摘したとおりである。

田代 (1999) は、セビリア世界選手権終了時の総括で、「なぜ日本の陸上は弱いのか。・・・(中略)原因を探っていくと、体力の差だけではない、世界の舞台で力を発揮できない日本陸上界の内弁慶ぶりが浮き彫りになってくる。」と指摘すると同時に、「参加することに意義有で、重圧を感じずにレースに出ている。」とも述べている。また、児玉 (2004) は、アテネ・オリンピックを取材し、多くの選手が「緊張していたわけでも、のまれたわけでもない。大会までは好調だったし、競技場に入っても楽しめた。だけど、思っていたような結果が出せなかった。」というコメントを受けて、「国際大会で緊張しない、のまれな程度の感覚では、オリンピックでは戦えないのではないかと思うのだ。すさまじいほどの緊張感やプレッシャーを背負った上で臨み、そんななかで確実に結果を出していけるだけの強さをもっていることが、真に必要な条件なのではないか、と。」と述べている。これと同様なことは、すでに野村 (1999) が、セビリア世界選手権で期待された100・200 mで惨敗した伊東が『緊張感が出てこない』と話したことを取り上げ、「精神的に万全の状態での競技に臨めなかった」ことが、敗因にもなったことを指摘しているのである。

実力が発揮できなかった多くの日本選手と、ほとんどが実力を発揮して優勝した選手の違いは、田代 (1999) や児玉 (2004)、野村 (1999) らが指摘しているように、案外、オリンピック大会への臨み方(強い意気込みと高い緊張度を持つこと)に大きな差があるのかも知れない。

4. 日本選手団と優勝者群の実力発揮度の比較

表3は、アテネ・オリンピックにおける日本選手団と優勝者群の実力発揮度について、比較したものである。ここで示す実力発揮度は、基本的には達成率によっているが、1)でも述べたように、マラソンについては、外的条件(炎暑と起伏)を考慮する必要があるために、基準となる外国選手の達成率を参考にして判断を下したものである。この結果、表に示されているように、優勝者(男女共)の約90%が実力を発揮していたが、日本選手の場合は、男子の約40%、女子の約30%しか、実力を発揮できなかったと言える。このことは、日本選手団として非常に大きな問題であると考えられる。

いずれにしても、選手個々人については言うまでもなく、(財)日本陸上競技連盟ならびにコーチ陣は、

実力が発揮できなかった選手や団としての原因を早急に究明し、その対策を講じていくことが必要である。

5. 日本選手団と優勝者群の年齢・体格指数と達成率の関係

① 年齢(表1・表2参照): 日本男子群の平均年齢は25.3 ± 3.7才、優勝者男子群は25.9 ± 4.7才であり、やや優勝者群の平均年齢が高かった。日本女子群の平均年齢は26.6 ± 3.1才、優勝者女子群は25.1 ± 4.3才であり、日本女子群の平均年齢は高く、ベテラン選手が多かった(26才以上は9名で約70%)。ちなみに、前回シドニーの平均年齢は、日本男子群が26.8才、優勝者男子群が27.1才、日本女子群が25.9才、優勝者女子群が28.0才であったことからすると、今回のアテネでは、日本男子群と優勝者(男女共)群は若返ったが、気になることは、日本女子群の若返り(新旧交代)がスムーズに行っていないと思われることである。

ところで、日本選手団の年齢と達成率との関係を見てみたところ、男子群の場合、26才以上(11名)の達成率は96.6 ± 2.6%、25才以下(13名)は96.3 ± 3.9%とほぼ同値であり、年齢(経験)差はなかった。また、女子群の場合は、26才以上(9名)の達成率は94.8 ± 5.0%、25才以下(4名)は91.4 ± 2.7%であり、特に25才以下の(若い)選手4名とも、実力が全く発揮できていなかったばかりか、余りにも悲惨な結果であったことが指摘される。

② 体格指数(BMI)(表1・表2参照): 図5は、日本選手(男子・女子群)と優勝者(男子・女子群)のBMI(平均値)を比較したものである。BMIは「22」が理想値とされる。この点、バランスの取れた体型を想定させる優勝者群(男女共)に対して、日本選手団(男女共、特に女子群)の細身体型は、

表3 アテネ・オリンピックにおける日本選手団と優勝者群の実力発揮度

	◎	○	△	×	××	選手数	実力発揮者割合(%)
日本男子	1	9	9	4	1	24	41.67%
日本女子	0	4	4	4	1	13	30.77%
男子優勝者	8	5	2	0	0	15	86.67%
女子優勝者	5	2	0	1	0	8	87.50%

(注) 数値は人数を示す。リレー2種目は入っていない。
◎は自己記録更新者、○は達成率98.0%以上(マラソンは条件を考慮)。
実力発揮者は◎+○人数とした。△・×・××は実力が発揮できていない程度を示す。
優勝者は日本選手が出場した種目のみを対象とした。

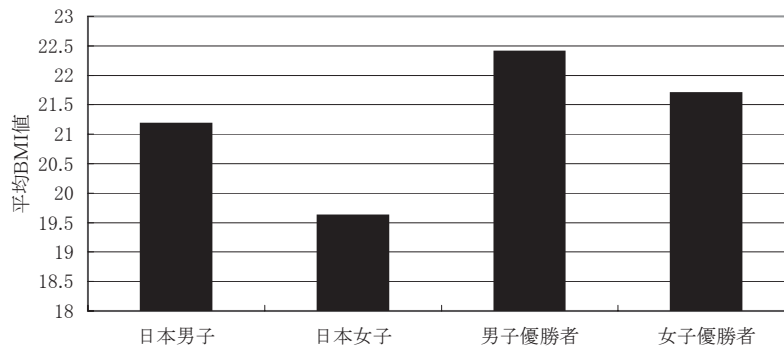


図5 アテネ・オリンピックにおける日本選手と優勝者のBMI平均値の比較

パワー不足（たくましさに欠けること）が連想されるところであり、今回のアテネ・オリンピックの達成率の低さと、関係があるように思われて仕方ない。

IV. 要約

アテネ・オリンピック大会における日本選手・団の達成率ならびに実力発揮度について分析・検証したところ、以下の様な結果が得られた。

1) 日本の男子群(24名)の達成率は $96.5 \pm 3.4\%$ 、女子群(13名)は $93.7 \pm 4.7\%$ と、共に低いものであり、特に女子群は著しく低いものであった。また、日本男子・女子群それぞれの達成率は、優勝者男子群が $99.7 \pm 1.4\%$ 、優勝者女子群が $99.5 \pm 1.9\%$ であったのに比較して、それぞれ $1\% \cdot 0.1\%$ レベルで有意に低いものであった。

2) 実力をほぼ発揮できたと考えられる達成率 98.0% を超えた日本選手は、男子8名・女子2名の計10名(27.0%)と非常に少なかった。また、自己記録を更新した日本選手は男子1名のみであった。いっぽう、優勝者(男女23種目)の 78.3% (18名)は達成率 98.0% を超えており、 56.5% (13名)は自己記録を更新していた。

3) マラソンの外的条件(炎暑と起伏)を考慮した結果、実力をほぼ発揮できたと考えられる日本選手は、男子が約 40% 、女子が約 30% であった。これに対して、優勝者(男女共)の約 90% は実力を発揮していた。

4) 日本女子選手群の平均年齢は 26.6 ± 3.1 歳と高く、若返りがスムーズに行っていないことが推察された。

5) 日本選手団のBMI値は、優勝者群に比べて低く、細身型であり、心身のパワー不足が連想された。

以上の結果、今回のアテネ・オリンピックにおける日本選手団の実力発揮度は、優勝者と比較して明らかに低いものであり、 $60 \sim 70\%$ の選手が不本意

な結果に終わっていた。この原因としては、調整の失敗、体調不良や怪我、さらには大会への臨み方(目標や意気込みの低さ)や精神的な問題(あがり、緊張度やメンタル・タフネスの低さなど)が考えられたが、オリンピックや世界選手権などの大会において、実力が発揮できない選手が多いという日本選手・団の問題点は、実は、ずっと以前から続いていることである。改善を図るには、早急にその原因究明と対策が講じられなければならない。

文献

ベースボール・マガジン社編(2004)2003年度記録集計号。

ジム・レーヤー、小林信也訳(1987)(株)ティビーエス・ブリタニカ。

JOC(2004)OLYMPIAN(AUTUMN)19-20,24.

児玉育美(2004)オリンピック総括、陸上競技マガジン10月号、120-121.

野村隆宏(1999)惨敗日本どうした、毎日新聞・平成11年8月29日付、23.

岡野 進(1995)第12回アジア大会・陸上競技選手の成績(記録)についての一考察、陸上競技紀要第8巻、24-34.

岡野 進(1996)95福岡ユニバーシアード大会(陸上競技)における日本代表選手の競技成績についての一考察、陸上競技紀要第9巻、11-19.

岡野 進(1999)99セビリア世界陸上競技選手権大会における日本代表選手と優勝者の記録「達成率」について(資料)。

岡野 進(2001)シドニー・オリンピック陸上競技における日本代表選手の実力発揮度を考えるー日本代表選手と日本選手の「記録達成率」の比較を通して、陸上競技マガジン3月号、128-133.

陸上競技マガジン編集部(2004)アテネ・オリンピッ

ク陸上競技完全ガイド、陸上競技マガジン9月号別冊付録、4－74.

田上幹樹(2001)生活習慣病を防ぐ七つの秘訣、PP. 53-57、筑摩書房.

陸上競技マガジン編集部(2004)男・女マラソンの分析など、陸上競技マガジン10月号、3－11、PP. 58－64.

Schurbert, Bernd・陸上競技者編集部訳(1992)1991年世界陸上競技選手権大会の分析、陸上競技研究第9号、55－66.

田代 学(1999)世界陸上総括、サンケイスポーツ新聞・平成11年8月31日付、P. 4.